

自己評価報告書(最終報告)

報告者

自然系コース(理科)
／村田 守

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

昨年度申請の科研費の採択結果がまだ届いていないので、何とも言えない。しかし、不採択を前提の問のようであるので、その前提で答える。「西南日本外帯1億年前の花崗岩の探索」(基盤研究C)を予定している。直近5年で海外学術誌10編以上の研究業績を有しているが、研究分野の採択状況は厳しい(研究業績でなく学閥で優先配分されるため)。平成24年度は、連合大学院博士課程の研究費が採択されており、その成果を基に別分野で申請するかもしれない。

2. 点検・評価

直近5年インパクトファクター付き海外学術誌10編に基づいた基盤研究Cは、不採択であった。科研費は研究業績に基づいて公平に配分されるものではないことは了解しているが、科研費審査員の研究業績以上の研究業績を来年度以降もあげ続け、本来の目的=論文を書き研究業績をあげることができるよう努力したい。なお、2012年はインパクトファクター付き海外学術誌に2編論文公表することができた。13年度の科研費申請の研究業績欄に直近5年インパクトファクター付き海外学術誌10編以上記入でき、活発な研究活動を示すことができる。科研費が不採択のために研究が進まないことがないように、連合博士プロジェクト研究と経産省標準化重点領域の外部資金を受けることができた。また、JSPS2国間交流事業にも申請した。なお、研修として調査研究も実施した。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

- (1)大阪府や滋賀県の高次教員の地質学・岩石学の指導を続けており、今後も指導の折に大学院進学を勧めたい。彼等が入学に対して二の足を踏んでいる「教育実践フィールド研究」の選択必修化の早期実現をお願いしたい。
- (2)岡山理科大学に実験に行くことがあるが、その際も従来通り長期履修生を含めた大学院進学を依頼し、希望学生には説明を行う。
- (3)国内学会で教員志望の他大学学生に本学大学院の概要を説明し、進学を勧める。
- (4)教員免許更新講習・出前授業等においても、大学院進学を勧める。

2. 点検・評価

- (1)大阪府・京都府・滋賀県高次教員の地質学・岩石学の現地指導を行い、大学院進学を勧誘を行った。
- (2)岡山理科大学に実験で訪問した際に、学生に長期履修制度を説明し、大学院進学を勧誘し、教員にも依頼した。また、香川大学理工学部の学生が実験に来た際に、長期履修制度による大学院進学の説明を学生・教員に行った。
- (3)地質学会(大阪府立大学)において、長期履修制度を他大学教員に説明し、教員免許取得希望者の本学進学を依頼した。
- (4)教員免許更新講習(100名x2回、合計200名)に対し、本学大学院の概要を紹介し、入学を勧誘した。
- (5)マレーシア国立マラヤ大学附設マレーシア国費日本留学生養成校を訪問し、大学院説明会を行った。また、当該校に派遣されている日本人現職教員に帰国後本学大学院への進学を勧誘し、各種資料を手渡した。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- (1) プレゼンテーションの能力を身につけさせる。
- (2) 自らの学力を正しく判断出来る機会を設け、自らの学びの動機付けの機会を与える。
- (3) 指導書に首っ引きの教員ではなく、自ら教材研究や実験方法の開発が出来る教員になれるように指導する。
- (4) 連合博士課程院生の指導のみならず他大学の院生や海外の大学の院生の指導も行う。

2. 点検・評価

- (1) 1年生から理科の学生にプレゼンテーション能力が身につくように指導し、教員採用試験前には学生・院生の希望者に教員採用試験でも良い結果が得られている。
- (2) 学生・院生自身が自らの学力を正しく把握できるように、教採頻出問題関連の演習を行い、自主的に採用試験対策ができるように指導した。教採以外では、身近な現象に隠されている科学の原理を教え、驚きが自主的な学びの動機付けになるように指導した。
- (3) 指導書の実験方法の誤りや不備を指摘し、学生・院生が自ら教材開発ができるように指導した。
- (4) 連合博士課程において、博士号獲得1名(主指導教員)・博士候補試験合格1名(副指導教員)の指導を行った。香川大学、バーリア大学、テッサロニキ大学、タブリッツ大学等内外の大学の学生・院生の指導も行った。

II-2. 研究

1. 目標・計画

- (1) 専門分野において、内外からの高い評価を得続けられるように努力する。
- (2) 海外学術誌に論文を公表する。
- (3) 国際学会においても積極的に発表を行う。
- (4) 海外の研究者と共同研究を積極的に進める。

2. 点検・評価

- (1) 内外学術誌からレフリーを依頼され、専門家間での高い評価を受けた。学会誌の巻頭言の執筆依頼も受け、これも高い評価を受けていることの証左であろう。
- (2) インパクトファクター付きの海外学術誌に論文2編を公表した。
- (3) 国際学会において発表を行った。また、国際会議においてもプロジェクトリーダーとして、積極的に運営に努めた。
- (4) アルゼンチン、イタリア、イラン、エジプト、英国、ギリシャ、中国、ドイツ、パキスタン、ポーランドの研究者と共同研究を進めることができた。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- (1) 大学運営に参加する機会があれば、積極的に役割を果たす。
- (2) 本学が社会に開かれた大学であることのアピールできる機会があれば、積極的に役割を果たす。
- (3) 本学と他大学との大学間連携事業があれば、積極的に役割を果たす。

2. 点検・評価

- (1) コース長として、大学の運営に協力した。
- (2) 教員免許更新講習3件、大学開放事業1件、アドバイザー講師6件、フレンドシップ事業1件、あすたむらんど徳島サイエンスフェア講師2件を行い、本学が社会に対して開かれた大学であることをアピールすることができた。
- (3) 四国大学間連携による危機管理教育に関する検討会のメンバーを務めた。
- (4) 地学新任教員の教員選考委員会委員長として、女性教員採用に尽力し、本学の女性教員採用率の向上に貢献することができた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- (1) 附属学校・社会との連携の機会があれば、積極的に役割を果たし、大学で学んだこと・明らかにしたことを社会に還元する。
- (2) 国際交流の機会があれば、積極的に役割を果たす。
- (3) 外国人研究者の招聘や外国人研究者との共同研究・学術交流を積極的に行う。

2. 点検・評価

- (1) アドバイザー講師・大学開放事業・フレンドシップ事業・あすたむらんどサイエンスフェア講師等、研究成果の社会還元を積極的に勤めた。
- (2) ベトナムからJSPS2国間交流事業の申し出を受け、日本側の共同研究者となった。現在進行中の国際共同研究の他に、新たな協同研究を開始し、研究面から国際交流の途を拓いた。
- (3) 社会地域連携センター外国人客員研究員としてペイエノール大学講師Dr. Jamshid Ahmadianを迎えた(7月～12月)。
- (4) ミニユフィア大学Prof. Dr. Hassan Eliwa(当時、京都大学理学部客員教授)を11月に本学に迎え、共同研究の打ち合わせを行った。
- (5) 耐火物のISO/TC33において、プロジェクトリーダーとして硫黄の化学分析方法のNWIP提案を行い、各国投票の結果承認された。今後はポーランド・ドイツとも協議を行い、ISO規格を作成する。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

- 教育・研究成果をあげ、本学に貢献したことは上記の通り。それ以外にも、以下の件で本学の名前があがるようにした。
- (1) ブラジル政府派遣研究者(PD)の受け入れを本学で1名だけ承諾し、文科省のHPに本学をリストアップすることができた。
 - (2) 国立大学協会の「国立大学の東日本大震災復興支援」に新南海地震に備えた減災・防災教育として、本学を掲載させることができた。
 - (3) 徳島県中学校副教材「サイエンスとくしま」の編集委員として、徳島県全中学生に対して本学の宣伝を行うことができた。
 - (4) 連合大学院代議委員、地学分野代表者、鳴門教育大学自然系副代表者として、連合大学院業務にも積極的に貢献した。
 - (5) 関西広域連合構成府県防災・危機管理分野講師。